

島根大学一般教育英語再履修クラスにおける効果的授業実践方法 －英語リメディアル教育の視点から－

奥羽 充規

0. はじめに

日本の大学が全入化時代を迎えて久しい。それと同時に、ユニバーサル化している日本の大学において学生の学力低下が大きな問題となっている。一般教育科目の英語に関してもその影響は非常に強く、実際、その科目を担当している我々教員の負担も今後増えることはあっても、それが減ることはないであろう。そのため、今後大学はますます低下していく学生の学力の補完を考えたカリキュラムや授業のあり方について真剣に考えなければならないと同時に、我々教員もそのような学生に応じた教育方法や授業方法を構築していく必要がある。

その中でも、再履修クラスという存在は教員・学生の双方にとってそれぞれの意味において負担が大きく、多くの教員にとってはできれば担当したくはないクラスの1つであろう。もちろん、再履修クラスが今に始まったわけではない。現在のように、学生の学力低下が叫ばれ始める以前より、多くの大学において単位を落とした学生の救済措置としてそのクラスの開講はされていたのである。学生が単位を落とす理由として、勉強不足・欠席超過・長期にわたる病気など個人によってその理由は様々である。しかしながら、学生の学力低下の深刻さが叫ばれはじめ、リメディアル教育の必要性がいたるところで認識されてくるにつれて、再履修クラスの性質及びその開講の理由がだんだんと異なっていくように思われる。現場において日々「何かがおかしい」と心で叫びながら多くの教員がそのような授業を担当していると考えられるが、そのおかしい何かを、そしてその理由を理解しない限りは、ただ同じ授業を再履修として繰り返しても単位を落とす学生はどんどん増え続ける一方であろう。

本論文においては、そのような一般教育英語の再履修クラスの授業において英語学習に対する学生の意識を向上させ、授業への取り組みに関する動機を高める方法を提案する。同時に再履修クラスにおいて英語リメディアル教育の視点を持つ必要性について言及し、その具体的方法論としてリアクションペーパーの紹介及び実践方法を説明する。そして、授業を通じた学生の反応及び意識・アンケートに書かれた学生の記述を通して今後の大学生に必要な教育とは何かについて論じる。

1. 一般教育英語再履修クラス

1.1 一般教育英語再履修クラスとは

日本の大学において専門教育修学前に教養教育が行われているのは周知の事実である。その中の外国語科目にしても、第1外国語として英語がほとんどの大学において必修科目として扱われている。一般教育英語クラスとはその教養教育の英語のクラスのこと

あり、その再履修クラスとは、正規のクラスの単位を落とした学生が来年度以降にまたそのクラスを履修しなおしたり、何らかの理由で正規のクラスをその年次に履修できなかった学生が別の年次にその科目を取り直すために特別に設定されたクラスのことを指す。津田(2007)はそのような大学必修英語の再履修学生に関する調査を行ったが、その中で再履修クラスについて次のようにその定義を述べている。

大学や個々の英語教員からの、学生への積極的な働きかけにもかかわらず、依然として、大学や各教員が設定したレベルの一定の成績を修めることができず、単位を取得できない学生の層が存在する。この単位未修の学生に対する大学の救済策として、各大学では「再履修用特別クラス編成」「通常クラス編入」「代替科目設定」などの対策を講じている。津田(2007)

もちろん、すべての大学においてそのような再履修クラスが設定されているわけではなく、大学においては下位学年の学生とそのクラスを受講する形のみをとっている大学もある。そもそも外国語のクラス以外では、必修科目とはいえそのような再履修クラスを設定することは稀であり、そのクラスが存在しているということ自体それだけ単位を落とし、後年に受けなおす学生の数が多いことをあらわしている。

1.2 一般教育英語再履修クラスにおける問題点

先ず一般教育英語再履修クラスの内容であるが、その授業内容も大学によって様々である。科目名が正規のクラス名と同じであるので正規のクラスのやり直しとして同じ内容を実施したり、または再履修クラス用に新たに設定された内容を授業として扱う場合もある。その際には、時には正規のクラスよりも単位取得の難易度が低いケースも数多く存在する。よって、単位としての価値が正規の授業とかわるわけではないこともあり、その授業の扱いが非常に困難かつ繊細なのである。単位としての価値が正規の授業と同じであれば、学生の中には単位取得の難易度が低い再履修クラスを履修することが可能なことがわかれば最初から次年度以降にそのクラスを履修することを選択することもある。また、再履修クラスが特別にあることが前提で正規のクラスに出ている学生の中には今回がだめでもどうせ来年度も受講できると甘い意識を持つ学生もいる。そしてそうであると、学生への公平性という視点がまず問題となるのである。

次に授業を実際に実施する教員側から見た問題もある。すでに述べたように再履修クラスを受講している学生の履修理由は多岐にわたる。筆者が昨年担当したクラスにおいて実施した再履修クラスにおける無記名アンケートによると次のような理由が挙げられた。

○再履修クラス履修理由（アンケート時期：平成 23 年度後期 英語Ⅱ B）

- ・学力不足（授業が全然理解できなかった、期末試験ができなかった）
- ・学習怠慢（勉強をしなかった、すればできた）
- ・欠席超過（4 回以上欠席により未修）
- ・授業への不適応
- ・大学自体への長期欠席（病気や家庭の事情等）
- ・履修登録忘れ
- ・授業が嫌だったから（担当教員が嫌いだから）
- ・英語の勉強の仕方がわからない

ここであがっているだけでも、さまざまな理由で再履修クラスを受講していることがわかる。一般的に再履修クラスというと学力が足りない学生がたくさん受講しているイメージがあるが、学習怠慢や長期欠席、そして欠席超過の学生に関しては英語の学力自体は高いのであるが再履修クラスを受講している学生がいるケースも必ずしも珍しいことではない。つまり、受講学生の学力の多様化が存在しているのである。学力があるのだから、とりあえず授業にはでておいて試験を受ければよいのではとさえ考える我々の予想を超える学生が少なからず存在する。このような状況は学生の数が多い私立大学等では珍しいことではないかもしれないが、これが国公立大学となるとやはりその指導を行う教員側としてはその授業の運営に困難さを感じることであろう。

また、避けては通れない問題としては再履修クラスを何度も履修しているが単位が取れない学生のケースである。本研究では特にそのような学生にも焦点を当ててその効果的実践方法を考えているが、一見まじめであったり授業自体は毎回きちんと来るのであるがどうしても授業に集中できなかつたり復習をやってこなかつたり、または英語の基礎学力が極めて低すぎるにより大学英語の入門レベルにさえ達していないが故に何年越しで受講している学生の存在である。そのような学生をどのように授業の中において教育し、そして彼らの学習の動機付けをどのように高めていくのか、担当教員の悩みは尽きるものではない。

1.3 島根大学における一般教育英語再履修クラスの現状

筆者が勤務している島根大学では島根大学外国語教育センターが島根大学全学の一般教育科目の外国語を担当している。よって、英語のクラスも当然のことながら外国語教育センターの教員が担当しているわけであるが、その必修科目のクラスの種類は以下の通りである。

表1. 外国語教育センターが実施する教養科目における英語教育（必修科目）

学年進行	授業科目名等	単位数	備考
1年次 前期	英語 I A (1 単位)	1 単位 (必修)	
	「大学英語入門」		「大学英語入門」は単位認定なし
1年次 後期	習熟度別コース制（基礎コース、標準コース、上級コース）による科目 英語 I B (1 単位) 英語 II A (1 単位)	2 単位 (必修)	
	「英語補習クラス」		「英語補習クラス」は単位認定なし
2年次 前期	習熟度別コース制（基礎コース、標準コース、上級コース）による科目 英語 II B (1 単位)	1 単位 (必修)	

1年次から2年次の前期にかけて全部で4単位の必修科目設定で、この単位取得は全学において適応されている。

次に、ここ2年間における一般教育英語科目4単位の再履修学生の数について報告する。

表2. 島根大学一般教育英語クラス再履修人数（延べ人数）

2011 年	英語 I A	78
	英語 I B	139
	英語 II A	141
	英語 II B	133
2012 年	英語 I A	85
	英語 I B	166
	英語 II A	132
	英語 II B	187

この表で示しているのは、科目履修登録段階における述べ人数であるので、実際に再履修クラスに参加した学生はこの数よりは少ないと思われるが、それにしても決して少ない数ではない。この2年間の間だけでも明らかな増加が見られるが、その明らかな原因は未だ分かっていない。そして、英語科目の教員は正規のクラスに加えて、この再履修クラスの授業も受け持たなくてはならず、学生だけでなく、教員側の負担もまた軽くない。さらに、この表にはここ2年間のデータのみしか載せていないが、この数が今後増えることはあっても減ることは想像しがたい。全国の多くの大学においても同様の現

象は起きていると思われるが、各大学としてもそれぞれ対応する手段を急ぎ講じる必要があるのは明白である。

2. 英語リメディアル教育と一般教育英語再履修クラス

2.1 英語リメディアル教育とは

清田(2011)において言及されているように、これまで学校のリメディアル教育の目的とは「学習者の学齢を考慮し、その年齢時までに本来学習しておくべき知識や技能がみについていない学習者に、やり直しの教育を提供すること」と考えられてきた。したがって、多くの場合において大学のリメディアル教育とは山岡(2012)の定義にあるように、「入学者の学力低下に伴い専門教育の推進が困難である現状において、高校卒業までに習得すべき学習内容の補習の授業」を指すことが多い。確かに、18歳人口の減少や大学入試の多様化により大学生が身につけておくべき高校卒業レベルの学力を身につけていない大学生が増加しているのは事実である。奥羽(2011)でも言及しているように「その現状は各大学においてますます深刻化している」のである。そういった現状から2005年に日本リメディアル教育学会も創設され、さまざまな研究報告がなされている。だが、ここでリメディアル教育とは単なる学力補充のための補習と考えることだけで本当に十分かという、そこに疑問の余地が存在するのではないかと思われる。ただ学力が足りないから、その足りない部分を足すための方法論を研究するだけでは明らかに不十分なのである。その理由として、酒井(2011)では大学生レベルではない英語を基礎から学習してもせいぜい英検3級レベルの英語力をつけるだけであるとしている。したがって、6年間英語教育を受けてきた学習者がそれでも文法や単語がほとんど身につけていないという現実をどのように教員は受け止めるのかという問題がまず存在するのである。また、酒井はそのような英語が苦手な学習者は課題達成の成功や失敗の原因を能力や運命に帰属させる傾向があると言及している。清田(2009)はそのことを努力意識と能力意識という言葉で表現しているが、まさに至言というべきである。加えて、清田(2011)ではリメディアル教育では「英語学習の成立のための自立的学習を支える動機」の問題にどう向き合うかが課題であると言及している。Kiyota(2009)は、習熟度と学習動機が低い学生に対して調査を行い、その結果として中1で英語学習を始めた時は意欲的であった学生が一度苦手意識を持つと大学まで続く傾向があると報告した。初めは意識として持っていた努力意識を6年間の英語教育を受けた結果、能力意識に変わったものはその意識を容易には変えがたいということである。そして、そのような能力帰属を再び努力帰属に意識改革することがリメディアル教育の大変なところであると主張しているのである。したがって、多くの大学においてもまだ「基礎科目のやり直し学習」としての必要性が論じられている現状の中であっても、リメディアル教育に真に必要とされているのはそれだけではなく、学習者としての大学生の学習動機や清田(2010)の研究にある自尊感情の問題といった心理的な側面の解決法も必要としていると訴えている。本研究においては、英語リメディアル教育という言葉で意味する内容を、従来の「入学者の学力低下に

伴い専門教育の推進が困難である現状において、高校卒業までに習得すべき学習内容の補習の授業」という意味に加え「学生の過去の英語教育から損なわれた自尊感情を取り戻し、かつ自立的な学習への動機の獲得」を身につけさせることまで含むこととする。

2.2 英語リメディアル教育クラスと一般教育英語再履修クラスとの共通点

英語リメディアル教育クラスと一般教育英語再履修クラスでは、その履修の理由や履修形態が異なっているので、これらのクラスを同じ視点で比べることは厳密にはできない。というのも、大学によって英語リメディアル教育クラスは完全な自主的学習または単位認定のないクラスとして成立しているところや、正規クラスの単位認定の必須要件としているところなどその扱いが様々なのである。島根大学においては、一般教育英語を担当している外国語教育センターが独自に、または教育開発センターと協力して単位認定のないクラスとして英語リメディアル教育クラスを開講しているが、まだまだそのクラスにおける学生の参加状況はそう多くはない。しかしながら、何年間かの英語リメディアル教育クラスを通して多くの学生と接していくことにより、学生の中に見ることができる学生自身が欲しているような英語学習・英語教育への飢えのようなものを垣間見ることができるのである。以下に昨年度（2011年度）の島根大学の英語リメディアル教育クラスである「大学英語入門」を受講した学生の感想をいくつか載せるが、その中のいくつかのコメントの中からもそういった学生の心の叫びがこもっていると筆者は感じている。英語が得意な学生だけでなく、英語が苦手な学生もその多くが英語を身につけたい、英語を使えるように、そして理解できるようになりたいと心から願っているのである。

- ・今まで意識できなかった文法でも意識して理解できるようになった。
- ・I Aの授業にもつながるところがあったのでI Aの授業に対する不安感が少し減っていた。だから、分かりやすかったし、この授業を受けてよかった。ありがとうございました。
- ・英語に対する苦手意識が少しなくなった。
- ・黒板でのまとめが分かりやすくて良かった。復習（前回）用の小テストがあってもいいと思った。実際に外国人の方と英語で話す機会が何度かあったけど、消極的だったのでこれからは積極的に話したい。
- ・いつも楽しく、英語を学べることができ、より頭に入れることができたと思います。
- ・分かりやすかったです。
- ・文説明のときに板書をしてくれたのはとても分かりやすく感じたので、板書ももっとしてほしいと思いました。
- ・英語の基礎を身につけることができました。今後の学習に活かしていきたいです。
- ・面白い授業で、楽しかったです。英語力も前に比べて身についた感じがします。

- ・ “No pain, no gain!”
- ・ 英語は基礎的なことがあいまいだだったので文法をきちんとできてよかったです。
- ・ 少しは英語が分かるようになった気がします。
- ・ 分かりやすい授業でした。後期もスケジュールがあれば参加したいと思います。この授業を通して学んだことをしっかり復習して、身につけたいと思います。
- ・ 英語の基礎文法を改めて確認できたので良かったと思います。
- ・ この授業を受けて特に動名詞や to 不定詞の理解が深まったと思います。また、プリントを見直して、英語の基礎を定着させようと思います。
- ・ 実体験を交えてお話をされたり、とても面白い授業でした。段々人口密度が減っていくのはアレでしたが、、後期といわず、来年もお世話になります。
- ・ 基礎文法の勉強は大事なことだと感じました。授業を受けて、大変勉強になりました。後期も、文法の勉強をしっかりやっていきたいと思っています。
- ・ 授業がとても分かりやすく、面白い話を聞くことができたので、いつも楽しく受けることができました。後期もできれば受けたいです。
- ・ とても分かりやすく、スピードも良かったので楽しく受講することができました。
- ・ 熱の入った講義、とても楽しかったです。後期も受けたいと思いました。

英語が苦手な学生はその多くが自分がそうであること、機会があれば改善したいことを切に願っている。そのような心の叫びが実際に英語リメディアル教育の授業を担当している際も、そしてこの学生のコメントを読んだ際も聞こえてくる。そして、そのような学生自身の英語学習や英語教育に対する飢えは再履修クラスにもある程度当てはまるのではないかと私は推測している。一般教育英語の再履修クラスを担当したことがある教員には経験のあることであると推測するが、再履修をしている学生はもちろんその科目の単位が欲しいのであるが、安易に単位が取ればそれだけで良いと考えている学生ばかりではない。実際、再履修クラスの授業で扱う英語の授業レベルを下げたからといって学生の授業満足度や教員評価が上がるわけでもなく、やはり大学生としての質を求めている学生も確かに存在するのである。そのような再履修クラスを受講している学生にはどのように対応していけばよいのか。今回の報告はまさにそれに対する1つの提案なのである。したがって、英語リメディアル教育クラスと一般教育英語再履修クラスの共通点としてここで言及することができるのは、学生が心から求めていることの中には学生自身が熱望するような英語の授業を受けることはもちろん、自らも英語学習に対する学習動機を獲得したいという心の飢えがあるのではないかということである。

2.3 一般教育英語再履修クラスにおける英語リメディアル教育的視点

城一(2011)は「学習者の行動に影響を与える要因の一つが学習者の認識(belief)です。学習者は学習にたいして「できるかどうか」という期待や「やりたいかどうか」という価値などの主観的な意味づけを行っています。」と指摘している。すでに述べたように、

リメディアル教育では学生の自立的学習を支える動機をどのように持たせるかが1つの重要な課題となる。故に授業の中で学生が「できる」という気持ちや「したい」という気持ちを持たせることは英語を苦手とする学生を指導する上でも極めて重要である。また同時に、学生自身の「成長した」という気持ちや「学んだ」という実感を持たせることもまた効果的な自尊感情の向上へとつながる。Dörnyei(2001)は「時間はかかっても動機づけの質を発達させる方が大きな成果を期待できる」としているが、まさにそのような視点である。つまり、清田(2011)でも言及しているように、学生が過去の英語教育により傷つけられた自尊感情を癒し、自立的学習を支える動機を持つように教員側が学生を導くことこそ必要ではないかと考えられるのである。したがって、ここで言及している一般教育英語再履修クラスにおける英語リメディアル教育的視点とはDörnyei(2001)や清田(2011)にある、学生の自立的学習を支える動機をも持たせるというものと、学生の自尊感情の向上を図るという2つの視点である。

3. 英語リメディアル教育と一般教育英語再履修クラスに関する先行研究

ここでは、一般教育英語再履修クラス(論文上の表記では大学必修英語の再履修クラス)及び英語リメディアル教育に関する先行研究を紹介する。両研究ともに、一般教育英語再履修クラスおよび英語リメディアル教育に関する学生の意識をテーマにした調査研究であり、本研究の前提となる視点の出発点となるものである。再履修クラスを履修している学生の意識から何がわかるのか及びそのクラスで何が問題となっているのか、そして英語リメディアル教育において我々がこれから真に取り組むべき本当の問題は何なのかを提起しており、本研究における視点に影響を与え、かつ研究目的へのつながりを持っている。

3.1 津田(2007)における再履修学生に関する先行研究

津田(2007)では、大学英語のリメディアル教育の現状を探るという目的で九州地区の3大学で再履修学生134名を対象に質問調査を実施している。この研究の中で扱った項目は次の2点である。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">(1) 英語再履修クラス在籍学生の多様性(第1言語、英語資格試験取得状況、大学入試の種類と英語の試験科目の有無)(2) 学生の再履修クラスに対する態度(再履修原因に対する自己認識、英語再履修クラスに対する意見・感想) |
|---|

(1)の項目についてはその調査結果の細かい点についての言及はここでは避けるが、この調査においてまとめられている「再履修クラスのカテゴリーと特徴」に関する表は、調査を行った3つの大学における再履修クラスのクラス編成とその特徴を、その利点・問題点といった視点からわかりやすく報告している。

表3 再履修クラスのカテゴリーと特徴

クラス編成の問題点	利点	問題点
通常クラス編入型（私立文系）	クラス編成がしやすい。再履修生は、他の学生から学ぶ機会が多く、刺激を受ける。	どの学生が再履修か分からない場合は、教員の方での配慮が難しい。学年が下の学生と学ぶため、クラス内で、劣等感を感じる場合もある。履修する学生から見れば、通常の授業時間帯での履修になるため、時間割上、履修しにくい。
特別クラス編成、学部固定型（私立文系）	全員が再履修生であるというクラス内部の安心感。学部学年混合型に比べて、少人数にできる。	再履修学生ばかりのため、クラスの雰囲気の不活発になりがち。クラス編成が難しい。
特別クラス編成、学部学年混合型（国立）	全員が再履修生であるというクラス内部の安心感。クラス編成がしやすい。	クラスの人数が多くなりすぎる上、再履修クラスばかりのため、クラスの雰囲気の不活発になりがち。

津田 (2007)「大学必修英語の再履修学生に関する調査と考察」より抜粋

この表3から判断すると、筆者が勤務する島根大学は3番目のケースとなる。学部学年混合型であり、その特徴及び利点・問題点はまさに表のとおりである。次に、(2)の項目に関する調査に関してであるが、この調査では「再履修クラスの受講原因の自己認識」に関する質問についての選択式の調査と「再履修クラスのあり方に対する感想、意見、要望などがあれば、自由に書いてください」といった自由記述の調査を行った。先ず選択式の調査であるが、そこで再履修クラス履修の理由として一番多かったのが「出席不足」、2番目に「定期試験の点数不足」であった。次にくるのが「平常点不足」であり、この調査結果は予想通りである。また、「受講原因がわからない」といった選択肢を選んだものは2名ほどであり、少数であった。自由記述式の調査についてであるが、再履修クラスの開講システムについては次のような意見が挙げられた。

○肯定的な意見

<ul style="list-style-type: none"> ・「非常に助かる」 ・「落とした単位を取れるのでよいと思う」 ・「必要な英語の知識や能力が身につくという点が良いと思う。この制度はなくさないで欲しい。」
--

○否定的な意見

- ・「この授業が開講されていること、また履修申請の仕方がわかりにくかった」
- ・「取得可能なコマを増やしてもよいのではないかと思います。6限等」
- ・「土曜などに授業があると普段の日が少し楽になるので土曜とかにやってほしい」
- ・「現キャンパス以外でも開講するか他の言語単位による置換を可能にしてほしい」

また、テーマ、ティーチングスタイルに対する要望として次のようなコメントは非常に興味深い。

- ・「大学で英語を学ぶ意義がよく分からない。一般教養としてとらえなければならぬにしても、目的が見えてこない。英語を話せるようにするのか、英語の文化を知ることが目的なのか、文法を学ぶことなのか、そのような目的がよく分かる講義として欲しい。」
- ・「英語が苦手なのでなるべく簡単で興味がわくようなテーマがいいと思う。」
- ・「英語の単位を落とした人の受ける授業なのでまず英語への興味・関心を与えるような事をしてほしいと思う。」
- ・「やるならやるでビシッとやって欲しい。教科書も買ったんだから。」

もともと、多くの学生は出席不足が理由で再履修クラスを履修しているにも関わらず、学生からのコメントを見ると実に多くの問題提起をしていることがわかる。時にはそのような問題提起こそが理由で最初の授業を放棄したのだとさえ受け取ることができるのである。ここに挙げているだけでなく、まだまだ多くの要望が学生からは挙げられているのだが、ここに挙げられたコメントからだけでも学生の英語のクラスに対する期待や叱咤を受け取ることができるのである。

3.2 清田 (2010) にみられるリメディアル教育に関する意識研究

清田 (2010) は、「リメディアル教育における自尊感情と英語学習」というテーマでリメディアル教育対象の英語学習者の自己意識についての調査を行った。その調査の前提として藤田 (2005) や酒井 (2010a) といった先行研究とともに、Kiyota (2009) でも英語リメディアル教育の学生の学習動機を調査し、中学校や高校における英語学習の不成功体験を引きずる傾向があることを報告しているが、そこからわかったことは次のようなことである。

また、大学入学に至るまで学習動機が特に低い学生は、英語学習に否定的な感情を持っていることも判明した。このような学習意識を改善しない限り、学習意欲を喚起することは困難である。 清田 (2010)

清田は、これまでの先行研究を前提に英語学習における学習意識の重要性について言及するとともに、リメディアル教育において英語が苦手な学習者が長期間にわたる学習体験によって形成された否定的な学習意識を改善するためには、学習者の自己意識の深

層を明らかにする必要があると述べた。そして、中でも英語学習に対して否定的な感情を持っている中位・下位の学習者を対象として、表面には出にくい否定的意識をとらえ、分析し、その意識を肯定的なものに向かわせる教育的な対策の提案が重要であると言及している。そして、そのような教育的対策の提案として学生の学習意欲を刺激し、動機を高めるための重要な源泉として自尊感情に言及しているのである。すなわち、学生の自尊感情を高めるための教育的な対応策こそが必要であるということである。

清田の研究では、質問紙調査を行い、そしてその結果から因子分析を行っているが、そこから抽出された因子は2つであった。因子1は自己表現に関する否定的な因子、因子2は対人関係に関する否定的な因子である。具体的には、「自己表現における自信のなさ」と「対人関係の構築への不安」といった特徴がここからは得られたデータである。したがって、そのような学習者の否定的な要素を考慮にいれながら教室内の活動等の考慮が必要であるとの示唆がなされているが、ここでは具体的な方法論については言及されていない。しかしながら、この研究において「自己表現」と「対人関係」という2つのキーワードとともに自尊感情を考慮した授業の必要性を訴え、単に文法や単語力といった基礎学力の向上を目指した知識や技術の伝達型学習に加えて自尊感情の向上といった視点の必要性に言及したことは今後の研究への1つの方向性を与えるものである。

3.3 先行研究2例から得られた本研究の意義

以上、これまで2つの先行研究を紹介してきたが、津田(2007)から得られた示唆としては再履修の学生にもまた授業に対する学習意欲や授業への期待を持っている学生が存在し、授業を通して英語力の伸張や授業への達成感を求める学生が少なからず存在することである。彼らの多くは再履修の授業だからこそ、それに合った授業をして欲しいと願っており、英語を勉強することに対して苦手意識はあれど、なんとかしたいという気持ちを読み取ることができる。そして、清田(2010)の研究からはやはり、従来の英語リメディアル教育の枠組みにおける活動、すなわち単に文法や単語力といった基礎学力の向上を目指した知識や技術の伝達型学習だけではリメディアル英語教育は成立しないことを示唆している。本研究では、このような視点に立脚して、学生の英語学習及び授業への参加に関する動機づけの向上や達成感を通じた学習意欲の向上を図るための方法論としてリアクションペーパーの一般英語教育再履修クラスでの使用を提案している。単なる授業テクニックではなく、教員と学生とが授業後半に使用する1枚のハンドアウトを通してどのようなリアクションを見せていくのか、大学の教員として再履修クラスの授業の在り方に1つの提案をすることになることと推測する。また、このハンドアウトが学生の自尊感情の回復や、自律的学習への動機づけへとつながっていきうるのか、もしそうであるならばどのようにそれが行いうるのかを分析することは、今後の英語リメディアル教育の視点からも意義あることと思われる。

4. リアクションペーパーを利用した授業運営および授業実践方法の紹介

本章では、本論文における授業の実践方法について説明する。具体的には英語リメディアル教育の視点を持った授業実践を行うための方法論としてリアクションペーパーという授業時配布ハンドアウトの使用について紹介及び説明していく。

4.1 リアクションペーパーとは何か？

一般的にリアクションペーパーと聞くと、多くの人々が主に多人数講義のような聴講型の授業形態において教員が学生の出席を確認することに用いたり、授業の感想を書かせることによって学生の反応を見るために授業の終わらないしは開始時に配布するハンドアウトのことを思い浮かべることと推測する。今回紹介するリアクションペーパーとは、もちろんそのような要素を含んではいるがそれだけでなく、学生自らが体感していく自己変容や学習意識の変化、そして教員側がそのハンドアウトを通して学生に見ることができるリアクションを引き出すためのペーパーという意味を持っているのである。その内容は基本的に以下のようなものである。

－リアクションペーパーの内容－

1. 本授業の復習

→授業内で扱った長文、文法、語彙、英作文等の問題を解く

2. 授業内容の発展的問題

3. 本授業において自分が学んだ内容

4. 本授業についてのコメント及び質問

まず、その内容には授業の復習として問題を出題しているの、その問題の解答解説についての扱いをどうするかに関してであるが、クラスサイズにもよるが基本は教員側による採点がよいと考える。学生独自の判断による思い込みを防ぐこともその理由としてあるが、どこに躓いているかをこちらが確認することができるからである。基本は授業の復習であるが、まったく同じ内容ばかりでは学生に退屈感を与えることもあるので、クラスレベルによって発展問題の出題も必要となる。そして、これが特に必要であるが、授業に振り返りを求めるために、授業の中で学んだ内容及び本授業についての質問とコメントを書く項目を作ることにより、授業中に質問できない学生への配慮を行う。また、リアクションペーパーの目的については次のことが挙げられる。

－リアクションペーパーの目的－

1. 授業の振り返り（自分はこの授業を通して何を学んだか）

2. 授業における学び意識及び達成意識の形成

3. 授業内容の復習を通じた学習事項の定着

4. 担当教員との双方向的なコミュニケーション

毎回の授業の終わりにリアクションペーパーを課されることで、当然授業の振り返りを

行う。その振り返りを通して、自分が何を学んだのかを今一度振り返ることでただ漠然と授業を受けるだけという状態からの脱却を図る。また、毎回自分が何を学んでいるのかという問いかけを自らに課すことによって、学びの意識を持つことにつながり、そのことの繰り返しにより自らの中に学びの達成感を持つことが可能になるのではないかと考える。要は学びとは何かという問いを学生に問いかけることである。大学生にもなると思われる方もおられようが、むしろ大学生であるからこそ学びの本質、そして原点に返って欲しいという気持ちもここにはあるのである。速水(2008)にあるように、学習活動における達成感情が動機づけの重要な構成要素であり、教室から生じる感情から学習意欲を考えることが重要である。自ら学ぶことを再び取り戻すことにより、学びの達成感を学生に感じて欲しいと願っているのである。また、毎回教員と学生がリアクションペーパーを通したやり取りを続けるうちに学生と教員との間の心理的距離感も少しずつ埋まり、教員自身も時には学生から様々な刺激や発見、影響を受けることもある。

4.2 授業実践におけるリアクションペーパー使用の基本原則

リアクションペーパーは授業の復習としての要素を含んでいるので、授業の終了する10分～15分くらい前に配布するとちょうどよい。また当然のことながら、授業設計自体もこのようなハンドアウトを使用することを前提に、授業内容の要点をまとめておくことが求められる。以下に、その使用に関して基本的な原則を挙げる。

－リアクションペーパー使用の原則－

1. リアクションペーパーを書き込む時間的余裕を学生に与えること
2. 次回の授業の初めに必ず返却すること
3. 学生のコメント及び質問には必ず返答をすること
4. 授業当日学んだことを毎回必ず書くように指示すること
5. 学生の理解が悪い項目については、返却後に説明すること
6. もっともな質問や、興味深い質問に関しては授業内で紹介すること
7. 英語の枠にとらわれない質問でも歓迎すること
8. 復習として出題している問題からも定期考査への出題をすることの学生への周知

4.3 リアクションペーパーの使用例

以下に筆者が2011年度後期及び2012年度後期の英語ⅡBという科目名の一般教育英語再履修クラスにて使用したリアクションペーパーを紹介する。同じクラス名ではあるが、学生の英語レベルに合わせて使用したテキストが異なっているので、そのレベルも多少異なっている。

資料1：2011年度後期 英語ⅡB再履修クラス用リアクションペーパー



2011/12/15

1. Answer the questions below.

○以下の英文を読んで問いに答えなさい。下線部①の理由は何か、説明しなさい。また、下線部②和訳し、その具体的な手段を説明しなさい。

[A] Actually, the answer in which he was most interested was their weight. ① But he didn't let them know this in case they lied. ② The question asking them about their weight was buried deep in the questionnaire.

(1) _____
 (2) 訳: _____
 手段: _____

[B] But one question remains—how many of our surnames really date to that period many centuries ago, when Church and State decided to invade our privacy? And did we get surnames like Death, Strange, Killar, and Flasher?

●下線部①内容を説明しなさい。また、②の語の用法を述べなさい。

下線部: _____
 用法: _____

○日本語を参考に、次の()内に入る語を入れ、英文を完成させなさい。

(1) 会議に遅れてはいけないので、タクシーに乗りましょう。
 Let's take a taxi () () we are late for this meeting.

(2) 私は出掛けようとしていたが、その時電話が鳴った。I was () () go out when the telephone rang.

(3) こんな天気以外出したらちがいをひいてしまうよ。
 If you go out in this weather, you'll () () a cold.

(4) 私は犯罪と貧困の間の密接な関係を確信している。
 I'm sure of the () () () crime and poverty.

○次の日本語を英語に、英語を日本語に訳しなさい。

(1) 確信 (4) reliable
 (2) 不正確 (3) 理める
 (3) アンケート (6) a genetic effect

2. Write down here what you have learned in today's class.

3. Write any comments or questions if you have.

学部: _____ 学生番号: _____
 氏名: _____

資料2：2012年度後期 英語ⅡB再履修クラス用リアクションペーパー



2012/11/21

1. Answer the questions below.

○以下の問いに答えなさい。

[1] 次の英文を読んで、問いに答えなさい。

I grew up in the countryside, and so the issues that affect rural women were familiar to me. Most farmers wanted to plant cash crops, and they removed every inch of vegetation. We were facilitating soil erosion, and the soil was carried away to the river and the women had no clean water. When you have trees on your land, you can stop the overflow. If you harvest that water and it stays in the topsoil, you are most likely to maximize food production. When it runs off, it causes damage and you end up being hungry and not harvesting the crops.

1) 下線部①の意味を答えなさい。
 2) 下線部②の英文を①の意味を明らかにして日本語に訳しなさい。

[2] 次の英文を読んで、()に入る語を下の方から選び、記号を入れなさい。

Decisions 1.() how to manage the environment are being made by governments. 2.() are dominated by men. But women get the brunt of the impact of environment 3.(). If they don't have water, they are the 4.() who have to get it. If they don't have firewood, they are the 4.() who have to get it. Men can escape into urban centers and look for jobs. For the women, therefore, it becomes important to 5.() themselves and inform themselves and take action to hold governments 6.() and demand better policies.

a. degradation h. empower c. one d. ones e. where
 f. which g. accountable h. contributable i. on j. at

[3] 次の英文を読んで、問いに答えなさい。

To convince a farmer to plant a tree is not that difficult. You have to convince a farmer to plant a tree and not cut it down tomorrow. You have to tell the farmer, if you plant this tree and you take care of it, I'm going to give you a financial incentive to do so. Then were and I farmers on how to manage their resources. If they lose the soil when the rains come, that has nothing to do with the government. That's the fact that they have not been taking care of their land.

1) 下線部①の that を日本語に訳しなさい。
 2) 下線部②は「教育をしてみる」という意味の英語が入る。それぞれ () に入れよ。
 3) 下線部③を日本語に訳しなさい。また、④の部分に省略されている語を答えなさい。

訳: _____
 省略語: _____

2. Write down here what you have learned in today's class.

3. Write any comments or questions if you have.

学部: _____ 学生番号: _____ 氏名: _____

リアクションペーパーの使用目的、原則についてはすでに言及したが、その使用手順や授業形態については特に限定するものではない。それぞれの教員の授業形態及び授業計画で実施すればよいと考える。しかしながら、学生の学習の振り返りを図り、学生の自律的学習への動機づけをその目標とする以上はこの授業の中で何が重要なのか、この授業を通して学生に何を学んでほしかったのかが学生にとって理解できるような授業内容及びリアクションペーパーである必要がある。そうでなければ、その存在が学生にとって単なる英語学習プリントでしかないのである。したがって、ここにある2つの使用例にあるリアクションペーパーを使用した授業に関しても、基本は Reading と Grammar を中心にした総合英語的クラスであるが、その授業ごとに学生に訴えるメッセージを込めながら授業を実施するべきである。

5. リアクションペーパーを利用した授業実践における学生の反応およびアンケート結果

5.1 アンケート調査に見る学生によるリアクションペーパーの評価

2011年度後期及び2012年度後期実施の英語ⅡBという科目名の再履修クラスにてリアクションペーパーを使用した授業実践を行い、2011年度後期には期末試験、2012年度後期には中間試験の際にアンケート調査という形で学生の反応を調べた結果を報告する。

平成 2011 年度 英語ⅡB	平成 2012 年度 英語ⅡB
クラス人数：24名	クラス人数：23名
学部：全学（医学部を除く）	学部：全学（医学部を除く）
学年：3年生～5年生	学年：3年生、4年生

表4. リアクションペーパー使用に関する学生による満足度

○授業の終わりに配布したリアクションペーパーの使用について満足できましたか？		
評価基準	平成 2011 年度 英語ⅡB	平成 2012 年度 英語ⅡB
A. とても満足している	15	14
B. 満足している	9	6
C. どちらでもない	0	1
D. あまり満足していない	0	2
E. 満足していない	0	0

これは2期にわたって集計した結果であるが、2011年度後期に比べて、2012年度後期のほうが学生の評価はそれほど高いものではない。学生個人により、どのようにリアクションペーパーを認識しているのかが異なっている点もあるが、アンケート調査の実施時期によるものもその原因としては考えられる。2011年では学期末の期末試験時に行ったが、2012年では中間試験時であり、リアクションペーパーを使用してそれほど時間が経過していなこともその理由としては考えられる。しかしながら、両方とも実に9割近くの学生が「A. とても満足している」「B. 満足している」の項目を選んでおり、学生の

中での実感においてもリアクションペーパーの実施による満足度は非常に高いものであったといえる。

5.2 記述式アンケートからみた学生の感想と反応

次に、自由記述式で答えてもらったリアクションペーパー及び授業に関する感想、コメントを載せる。

○2011年度 クラス

- ・ポイントが分かりやすかったので、英語が苦手な自分でも意欲的に取り組むことができました。
- ・1つ1つ疑問に思ったことをリアクションペーパーで質問でき、さらに適切に返答してくださったのでもっとも面白い質問をと考えているうちにいろんなことを考えて学ぶことができました。
- ・リアクションペーパーの質問等のやり取りを含め、楽しかったです。
- ・内容に関連した小話（関連していなくても）が面白かったです。
- ・授業が分かりやすくて良かったです。
- ・大学に入ってから受けた英語の中で一番楽しかったです。
- ・今まで再履修も含め、多くの英語の授業を受けてきましたが、先生の授業が一番わかりやすく、受けやすかったです。
- ・楽しく学ぶことができました。
- ・英語に興味を持ったので、自分でも勉強して留学とかもしてみたいと思いました。
- ・昔は覚えていたけど、使わないとまったく忘れていることにびっくりしました。
- ・復習を通して理解が進み、意欲的に取り組むことができた授業でした。
- ・難しい内容だったけど、とても面白い内容があって、知らないことも知れてよかったです。
- ・いい教室だった。

○2012年度 クラス

- ・リアクションペーパーはその日の学習内容について復習することができたので非常に効果的だと思う。
- ・添削してくれるので理解が非常に深まり間違いが気づけて良かった。
- ・自分はあまり書かないが、授業への意見も書けるので何か要望がある人には都合がよく、気持ちよく授業が受けられると思う。
- ・今後も続けて欲しいです。
- ・その授業の振り返りになってちょうど良い。
- ・リアクションペーパーは自分のように学習内容の整理や振り返りが苦手な人間には本当にためになるのでこれからも続けてやって欲しい。
- ・授業のまとめになるし、自分の理解度や疑問点を確認できるので良いと思う。
- ・授業中に質問がしにくいので、リアクションペーパーを通して疑問点を解決することができ、とても良い。

- ・今回のように質問されるまでは何も思っていなかった。でも、使いやすく良いと思う。
- ・リアクションペーパーを使って振り返りや復習も大事だと思うが、私はその時間も長文を読みたいと思っています。

2011年度と2012年度ともに、きわめて肯定的なコメントが多いことは共通している。2011年度は学期の終わりに調査をしたこともあり、リアクションペーパーに関するコメントだけでなく、リアクションペーパーを含めた授業の感想やコメントを書く学生が多かったのに対し、2012年度ではリアクションペーパー自体に関するコメントを書く学生が大半であった。そこからは、期末時と中間時ではやはり授業に対する感じ方や思い入れが異なっているということが感じられる。2011年度は期末時に調査をすることで半期にわたる時間の経過から来る自らの変化や授業全体の振り返りをしていることが興味深い。加えて、多くの学生が授業内容は難しくても楽しかったと書いていることが特徴である。また、中には英語に興味を持った学生が少なからずいる。彼らは授業の中で受身としてそうなったのではなく、自らが授業を通して振り返り、そして自分自身の意欲や動機を向上させることで今まで感じてこなかった感情を取り戻したと言えまいか。さらに、きわめて注目すべきコメントが2012年度後期の記述の中に存在している。それは、上記の最後のコメントの「リアクションペーパーを使っての振り返りや復習も大事だと思うが、私はその時間も長文を読みたいと思っています。」というものである。言い方は迂遠であるが、「英語をもっと勉強したい」「長文をもっと読む時間、解説を聞く時間が欲しい」と訴えているのである。自らの学習意欲及び自立的な学習への意識が芽生えたコメントであると考えられる。

5.3 リアクションペーパーの使用から見てきたもの

筆者はこれまで、2011年の後期、2012年の後期という2期にわたってリアクションペーパーを使用した授業の実施に取り組んできた。学生のリアクションペーパーに対する満足度の高さやそのコメントからも見て取れるように、多くの学生がやはり、学びたいという気持ちを強く持っているのである。そして、言葉で表現できない達成感を得たいと願っているのである。それは自尊感情の向上でもあり、自立的な学習意欲の獲得でもあるであろう。今回の報告にもあるように、学生の多くが英語が中々習得できなくても、苦手意識を持ちつつその学習に抵抗があっても、彼らの背中をそっと押すことで楽しいと思える時間を提供することができるのである。対象とする学生は大学生である。ただ、面白いだけの内容や活動だけで楽しいと口にする小学生・中学生ではない。彼らが何を求めているか、その答えを追求することこそが、われわれ教育に関わる者の務めである。誰かに教わるだけでなく、自らが学びを意識し、そして自分を振り返る。自分で向上していく自分を意識する。そのような仕掛けをリアクションペーパーは果たしているのではないかと筆者は推測するのである。

6. おわりに

本論文では、まず一般教育英語の再履修クラスについて説明し、島根大学における現状とその問題点について言及した。加えて、英語リメディアル教育という視点がどのように英語再履修クラスと関わっているのかという点に関して、従来の英語リメディアル教育の視点とこれから必要とされる学生の自尊感情や自立的学習への動機付けという視点を紹介した上で、一般教育英語再履修クラスと英語教育リメディアルクラスとの共通点及び関係性に言及した。続いて、先行研究として、必修英語再履修クラスの意識調査及び英語リメディアル教育対象学生の意識調査を紹介することにより、今後の英語リメディアル教育や一般教育英語再履修クラスにおいて必要となる視点が何なのかを明らかにするとともに、本研究の意義について触れた。その上で、リアクションペーパーという授業内の学生の英語学習への振り返り、及び学び意識の達成を図るハンドアウトの使用法を提案し、その内容・使用方法・使用原則等について説明し、その使用例を紹介した。最後にリアクションペーパーを使用した授業に関する学生からの満足度及び自由記述によるコメントを2011年度後期、2012年度後期の2期にわたるアンケート調査を紹介し、その結果リアクションペーパーが学生の授業満足度及び授業に対する振り返りを促し、そして自らの学びの意識を向上させることにより授業への意欲を高めることができることがわかった。

今回紹介した授業実践を通して分かってきたことは、英語リメディアル教育クラスであれ、一般教育英語再履修クラスであれ、学生の本質として学びを達成したいという気持ちがあるということである。人という存在はそもそも知的欲求を持つ存在である。そして、大学生であればましてそのような知識欲や学習欲が非常に強いことは当然である。一定の学力レベルに達していないからそのレベルに達するための補充クラスを行うというだけでは、学生はやはり満足するものではなく、むしろこれまで培ってきた否定的学習体験を助長させてしまう危険性すらある。清田(2010)は英語リメディアル教育を実施するためのキーワードとして自尊感情という言葉を紹介した。学生の心の中の無意識的に英語学習を阻害するブロックをはずしてやるのが今後の教育には欠かせないということである。したがって、今後われわれ大学の教員が目指すべきは学生の本質を前提とした学生自身による学びの達成を援助することではないかと考える。英語リメディアル教育クラスを、そして一般教育英語の再履修クラスを必要としている学生にとって意義のあるクラスを展開していくためにどのような教育を提供していくことができるのか、その具体的な方法論の模索はまさに始まったところである。今回の研究はそのための1つの提案であり、今後ますます多くの方法論が研究されることを切に願うものである。

7. 参考文献

- Dörnyei,Z (2001)*Motivational Strategies in the language classroom*. Cambridge University Press.
Yoichi Kiyota(2009) "Motivation of Remedial EFL Learners(A Case Study of Japanese College EFL Learners)", 『リメディアル教育研究』 Vol.4, no.2,41-47.
奥羽充規 (2011)「中学校・大学連携における英語授業実践に関する一考察

- －島根県邑南町サマースクールにおける授業実践を通して－』、『島根大学外国語教育センタージャーナル』第7号、2012年3月、39-50
- 清田洋一(2010)「リメディアル教育における自尊感情と英語学習」、『リメディアル教育研究』Vol.5,no.1,37-43
- 清田洋一(2011)「否定的な学習意識を協同学習で変える」『英語教育』2月号 大修館書店、31-33
- 酒井志延(2010a)「大学生の英語学習意識構造について(上)」『英語教育』1月号 大修館書店、66-68
- 酒井志延(2010b)「大学生の英語学習意識構造について(下)」『英語教育』2月号 大修館書店、62-64
- 酒井志延(2011)「リメディアルと向きあう」『英語教育』2月号 大修館書店、10-12
- 城一道子(2011)「英語が苦手な大学生のための英語教育奮闘記」『英語教育』2月号 大修館書店、20-22
- 津田晶子(2007)「大学必修英語の再履修学生に関する調査と考察」、『リメディアル教育研究』Vol.2,no.1,1-6
- 速水敏彦(2008)『学習意欲を高める－子どもが学習に魅力や価値を感じる時』金子書房
- 山岡華菜子(2012)「英語リメディアル教育でのオーセンティック教材の使用」、『リメディアル教育研究』Vol.7,no.1,165-175